

日蓮大聖人御書全集

もうこのつかいごしよ

蒙古使御書

新版
1946
S
1948

もうこのつかいごしょ

蒙古使御書

けんじがんねん

さい

にしやまどの

けんじがんねん

がつ

さい

にしやまどの

かまくら

ことゆえ

おんくだ

よしうけたまわ

そうちら

けんじがんねん

がつ

さい

にしやまどの

もう
申すばかりなし。

もうこ ひと くび は

そうちらう

うけたまわ

そうちらう

にほん

また蒙古の人の頸を刎ねられ 候 こと 承り候。日本

こく かたき

そうちらうねんぶつ

しんごん

ぜん りつとう

ほつし

き

国敵にて候 念仏・真言・禪・律等の法師は切られずし

とが もうこ つか

くび は

そうちら

て、科なき蒙古の使いの頸を刎ねられ候 いけることこそ

ふびん そうら

しきい し

ひと

かんが 当

そうちらう

不便に候え。子細を知らざる人は、勘えあてて候を、

傲 い

おも

にじゅうよねん

あいだ

わたくし

おごりて云うと思うべし。この二十余年の間、私には

昼夜に弟子等に歎き申し、公には度々申せしこと、これなり。

一切の大事の中に國の亡ぶるが第一の大事にて候なり。
最勝王経に云わく「害の中の極めて重きは、國位を失う

に過ぎたるはなし」等云々。文の心は、一切の惡の中に、

國王と成つて政悪しくして我が國を他国に破らるるが
第一の惡にて候と説かれて候。また、金光明経に云わ

く「惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の
怨賊來つて、國人喪乱に遇わん」等云々。文の心は、國王

おんぞくきた

こくじんそうちらん

あ

とううんぬん

もん

こくこう

こくおう

ちゅうや

でしどう

なげ

もう

おおやけ

たびたびもう

な あくにん あい ぜんにん とが 当
と成つて悪人を愛し善人を科にあつれば、必ずその国他國
に破らるるるといふ文なり。法華經第五に云わく「世の恭敬す
るところとなること、六通の羅漢のごとくならん」等云々。
もん こころ ほけきょう かたき そうちみよう と そうろう
文の心は、法華經の敵の相貌を説いて候に、
にひやくごじつかい たつと かしよう しゃりほつ
二百五十戒を堅く持ち、迦葉・舍利弗のごとくなる人を、
こくしゅ ほけきょう ぎょうじや うしな
國主これを尊んで、法華經の行者を失わんとするなりと
と そうろう
説かれて候ぞ。

わ そ だいじ ほうもん もう べつ そうちら とき あ
夫れ、大事の法門と申すは別に候わず。時に当たつて、
くに だいじ すこ かんが 違
我がため國のため大事なることを少しも勘えたがえざる

ちしゃ そうろう もう かこ
が、智者にては 候なり。仏のいみじきと申すは、過去を
じかんが みらい 知さんぜ し す そうろうおんちえ
勘え、未来をしり、三世を知ろしめすに過ぎて 候御智慧
はなし。たとい仏にあらねども、竜樹・天親・天台・伝教
もう ほとけ ほとけ ほとけ ほとけ ほとけ ほとけ ほとけ
なんぞ申せし聖人・賢人等は、仏程こそなかりしかども、
さんぜ しよういん けんじんとう ほとけほど
三世のことをほぼ知ろしめされて 候いしかば、名をも未来
そうちら な みらい
まで流されて 候いき。

せん ばんぽう こしん おき いちじん 次
詮ずるところ、万法は己心に収まつて一塵もかけず、九山
はつかい わ み そな にちがつ しゅしよう こしん
八海も我が身に備わつて日月・衆星も己心にあり。しかり
もうもぐ もの かがみ かげ う み
といえども、盲目の者の鏡に影を浮かべるに見えず、嬰兒
えいじ

すいか おそ
げでん げどう ないてん しょうじょう
の水火を怖れざるがごとし。外典の外道、内典の小乗。
ごんだいじょうとう みな こしん ほう かたはしかたはしと そうちろう
権大乗等は、皆、己心の法を片端片端説いて候なり。し
かりといえども、法華経のごとく説かず。しかれば、経々
に勝劣あり、人々にも聖賢分かれて候ぞ。法門多々な
れば、止め候い畢わんぬ。

かまぐら おんくだ 恩々 おんひま ししゃもう
鎌倉より御下りそうそうの御隙に、使者申すばかりなし。
うえ しゅじゅ ものおく た そうちろう
その上、種々の物送り給び 候こと、悦び入つて候。
にほん みなひと なげ そうちろう
日本は皆人の歎き候に、日蓮が一類こそ歎きの中に悦
び候え。国に候えば、蒙古の責めはよも脱れ候わじ。な
そうちら くに そうちら もうこ せ
のが そうちら

れども、國のために責められ候いしことは、天も知ろしめ
して候えば、後生は必ずすかりなんと悦び候に、
御辺こそ今生に蒙古国の恩を蒙らせ給いて候え。このこ
と起こらば、最明寺殿の十三年に当たらせ給いては、御
かりは所領にては申すばかりなし、北条六郎殿のようにつくし
筑紫にや御坐しましなん。これは各々の御心のさからせ給
いて候なり。人の科をあつるにはあらず。また一つには
法華経の御故にたすからせ給いて候いぬるか。ゆゆしき
御僻事なり。これ程の御悦び、まいりても悦びまいらせ

そうら

たく候えども、

ひとき

人聞きつつましく候いて、

慎

そらうら

とどめ候い畢

止

そらうら

わんぬ。

ないじ

乃時

にしやまどのごへんじ

西山殿御返事

日蓮

にちれん

花押

かおう

お